令和六年、入学式式辞

学長の清水浩です。

皆さん、本学への入学おめでとうございます。そして本学を選んでくれたこと、ありがとうございます。また、本日はご父兄の方々にもおいでいただいておりますが、大変感謝しております。

今年も、とても前向きな皆さんが入学してくれました。私達教員一同は皆さんが入学してくれたことをとても喜んでおります。これから4年間、皆さんと大いに学び、大いに活動し、大いに楽しみたいと思います。

この大学は世界で初めての電気自動車と自動運転を学ぶ大学です。今、世界は急激に電気自動車化と自動運転化が始まっています。この変化に大学という立場で貢献するのが本学の目的です。

また。ここ、飯豊町は四季がはっきりしたところです。冬は、雪が積もります。この冬の雪こそが、自動車を開発するために重要です。それというのも、世界の中の有名な自動車の生産地は、デトロイトと、ミュンヘンです。これらの場所は冬はとても寒くて路面が凍結します。自動車開発には、設計者が、路面が氷や雪で車が滑るということを体感していることが重要です。このためにこれらの地域で自動車産業が発達したわけです。ここ、飯豊でも皆さんが同様の体験ができるということが、本学をこの地に設立したことの大きな意義です。

この最先端の分野で、なおかつ、飯豊町の気候の下で、私達教員一同は皆さんとともに新しい道を切り拓いて行きたいと願っています。

さて、入学式に当り、皆さんに覚えておいてほしいことが1つあります。それは、やるべきこと、やりたいこと、やっていることが一致できることが人生の幸せだということです。

やるべきこととは社会で求められていることです。車は便利な乗りものです。おかげで私たちの生活は豊かになりました。しかし、環境、エネルギー、事故、渋滞という4つの大きな問題を抱えてきました。

これらの問題を原因から解決できるのが電気自動車と自動運転です。ですから、この大学では社会から求められている「やるべきこと」を学ぶということになります。

「やりたいこと」とは、皆さんが好きなことです。

電気自動車と自動運転はとても幅広い分野にまたがっています。ここで学ぶことにより、化学、電気・電子、機械、情報といった一般大学の工学部の複数学科に渡る知識と技術を得ることができます。このため、この大学で学ぶことの一部でも皆さんが好きだ思えることがある筈だと期待しています。そして好きなことが見つかったら、それをこの大学で学び自分の研究として活動し、身に付けて下さい。

その上で、その結果をもって、「やっている事」、すなわち、好きな職業に就くことが皆さんにとっての幸せだと思っています。

この大学で好きなことを見つけて下さい。すると必ず幸せな人生が待っている筈です。

本学は専任の教員が23名と、非常勤の教員が20名で構成されています。すべて沢山の経験を積んで来られた世界を代表するような先生方です。

但し、これまで大きな会社に居て大学で教えることの經驗が浅い先生がかなり居られます。

すると教えることについては分からないこともあると思います。

なので、「半教半学」ということも本学では大事なことです。

知識は教員の先生方から学ぶとしても、教え方は皆さんから教員が学ぶというように、半分教え、半分学ぶということがここでの教育ということになります。

研究についても、新しいひらめきが最も大事です。それが生まれるのは教員からかも知れないし、皆さんからかも知れません。最初のひらめきから現実のものを作り上げるのが研究です。研究成果とするには、ひらめきを現実化する知識と、それを、確認することが必要です。その知識は教員が持っています。その上で、実際のものを作ったり、実験で確かめたりするのは若い皆さんの方が手早くできます。

このため、ここでも半教半学です。

ところで、この半教半学は私の思いつきではなく、慶應大学の創立者の福沢諭吉先生の教えにあります。日本で初めて大学を作ったのは慶應大学ですが、当時の先生方

も何でも分かっていたわけではありませんでした。そして学生とともに半分教え半分学ぶということが大事だったのです。

１５０年前のこの教えを本学でも取り入れて一緒に学び、教え合う大学にしたいと願っております。

もう一度、同じことを確認します。やるべきこと、やりたいこと、やっていることを一致できる職業に就くことが人生の幸せということと、半教半学ということを今日は述べました。

そして、もう一つ、本学は「電動モビリティシステム専門職大学」という大変長い名称の大学です。そこで、私たち教員が話し合い略称を決めました。「モビリティ大学」です。皆さんも、「モビリティ大学」という名前で本学を呼んでくれませんか。

改めて、皆さん入学おめでとうございます。

そして、この大学を選んでくれて感謝しております。

以上、私の式辞といたします。